

(目的・方法) 保育教育は教師の持つ人生観・教育観・育児観がその価値観が授業に反映され展開してゆくものと考えられる。本報告では、現在家庭科を担当している教師の持つ価値観及び性差の認識についての調査結果を報告する。方法は前報告と同様である。

(結果) (1) 教師の価値観: 21世紀について16項目の意見を設定し、教師の考えを1はい、2.いいえ、3.わからないの3段階で求めた。その結果6項目が学校段階(小・中・高)で有意に異った反応が認められた。全体的傾向としては、①人生の幸・不幸あるいは成功・失敗は天の定めというよりは本人の努力が重視され、金力や悪人によって世の中は支配され得ないとしながら、必ずしも21世紀は住みよくなるとは考えていない。②教師自身が母親である場合の子どもの保育は個人的解決かはかっていることが多い現状であるのに対して、将来の子育てについては、子育てを生きがいや楽しみにする母親は少なくなり、母親自身の人生の充実が重視され、父親の育児参加、保育の社会化が増大すると見通している。③家族の絆はもうく、機能は低下するであろうと認識している。(2) 性差の認識: ①男女の特徴は生殖機能以外でも能力、性格に生まれつき相異があるとする教師が多く、特に栃木の高校では割が相異があると認識し他地域より高率を示している。②性役割は、現実の能力差に応じて分担すべきと認識しているが、新潟の高校では否定する傾向が強い。しかし、どの地域においても男女を意識せず1人の人間として個性を重視した育て方を支持している。③性教育は、家庭と学校で積極的・意図的に教育するニヒを重視しており、小中学校が最も高い比率を示している。認識と授業の実践については更に検討を進めたい。